



眼科疾患の多い犬種は？

■眼科疾患 品種別発症率（0～10歳平均）

0～10歳の犬の給付金請求データをもとに、犬全体の眼科疾患の発症率を調査したところ9.3%であり、約10頭に1頭の割合で発症していることが明らかとなった。

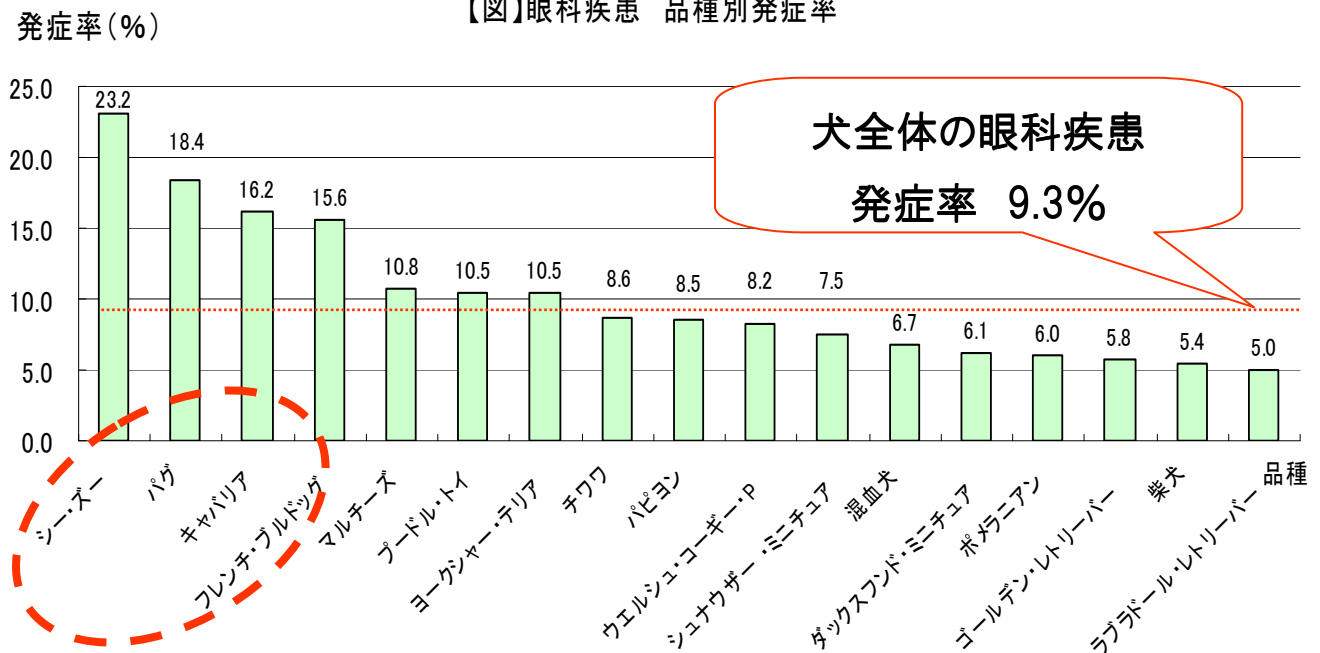
さらに、品種別で見ると、シー・ズーが23.2%と最も高く、犬全体の平均に比べて2倍以上の発症率であった。続いて、パグが18.4%、キャバリア・キング・チャールズ・スパニエルが16.2%、フレンチ・ブルドッグが15.6%と短頭種において発症率が高い結果となった。

※契約満了または死亡解約となった各個体の1年毎の契約について、その契約が開始した年齢毎に1契約＝1頭とみなし、当該疾病について1回以上の請求があった犬の割合を発症率とした。

※2004年4月1日から2008年3月31日までにアニコムクラブの共済契約に加入した犬681,039頭を対象に、犬全体の眼科疾患発症率を算出した。

※各品種の発症率は、0～10歳のそれぞれの母集団が1,000頭となるように補正した後に、全体平均を算出している。例外として、フレンチ・ブルドッグのみ9～10歳の対象件数が10に満たなかった為、0～8歳を対象とした。

【図】眼科疾患 品種別発症率



約10頭に1頭のワンちゃんが
眼科疾患を発症しています。
シー・ズー、パグ、キャバリア、
フレンチ・ブルドッグ は、特に注意！

